

# 惠心教學に於ける三階教の考察 (下)

八 木 昊 惠

## 四

「群疑論」卷四に於ける專雜二修章の義意は 上は終南を承け、下は横川を引起する要處として、固より純然たる淨土教學内部の問題として考へられて居るが、既に本稿第二節に於て一言した如く、「群疑論」に於ける本章の來意は三階師の論難よりするものである以上、一應こゝに注意して置く必要がある。「要集」本文第十問答料簡の第二往生階位十三問答は大きく分れて凡夫往生の義を決する前八問答と、專雜得失を判する後五問答となる。その第十一問答は「菩薩處胎經」を擧げて發意不生の疑を釋するものであるが、その間に經文を廣引して、憍慢國に染著するもの多くして彌陀の淨土に進んで往生する者の稀少なる事によつて問難を構成せらる。「要集」がこの問文の粉本を「群疑論」(大正四七<sup>p.50</sup>c)の文に求めた事

は對照の結果明白なるものがあり、「要集」次下にその答文として

答、群疑論引善導和尚前文而釋此難。又自助成云：(p.81B-C)として引く文は、即ち「群疑論」に於ける答文の撮要に外ならぬのである。従つて、三階師を破斥した「群疑論」の趣旨は「要集」に於ても地下水的な存在として考へられてもよいであらうと思ふ。かかる見解は、更に第五臨終念相に於ける「群疑論」引用の趣旨に於て考究すべきものとなる。臨終念相十三問答の内、第七問答は「佛藏經」の妨難を通じ、第八問答は「無量壽經」抑止文の妨を正しく通ぜられたものであるが、この連續二問答が、共に「群疑論」卷三に出で、同じく三階教への通妨である事に至つては、些か注目させられるのである。

先づ第七問答を見よう。そこには、「佛藏經」第三卷に據つ

て、大莊嚴佛滅後の四惡比丘が第一義無所有畢竟空の法を捨てて外道尼毘子の論を貪樂した業と、在家出家の弟子に對する不淨說法の罪のため、長時の墮獄を経たる後、十萬億歳の間常に頭燃を救ふが如く勤修精進するも猶阿鼻を免れずとある事を長引する。さて、この經證あるに「如何念佛一聲十聲即得滅罪往生淨土」(p.84B)と問ふ事は、この問答の劈頭に「若下品造五逆罪、由十念佛得往生者」と標して「佛藏經」を廣引する事と首尾相應して、明白に「群疑論」卷三の念佛五勝章(大正四七<sup>p.49</sup>B—<sup>p.50</sup>A)の問意である。所で、この「佛藏經」なる經典は三階教所依として其の教籍中に於て第四位の引用回数をもつ事を忘れてはならぬ。即ち「群疑論」では、三階師の念佛往生否定に對して、念佛に五勝ある事を縷々論じてあるが、今、「要集」の答文は此の答釋を撮要し

答、感師釋云、念佛由五緣故滅罪。一發大乘心緣。二願生淨土緣。小乘人不信有十方佛故。三阿彌陀佛本願緣。四念佛功德緣。彼比丘但作四念處觀故。五佛威力加持緣。是故滅罪得生淨土。彼小乘人不爾。故不能滅罪略抄(p.84B)と述べて全く自答を設けずに論意に隨順せられて居る。三階教排撃の淨土教家の内、その尤も痛烈なるものが「群疑論」の所明であるから、集主がこれに全同せられたのは當然であら

う。

「要集」次下の第八問答は、此の第七問答を承けて問。若爾、云何雙觀經說十念往生云唯除五逆誹謗正法

(p.84B-C)と問を起してある。これ亦「群疑論」卷三の逆誹除取章(大正四七<sup>p.43</sup>C—<sup>p.46</sup>C)なる一大問答の問意であつて、古來淨土教學に於ける重要論題である。その詳論は當面の目的ではないが、「要集」に諸師の義の一端を掲げて、

如是有十五家釋。感法師不用諸師釋。自云：(p.84C)として、以下「群疑論」の文を出して更に加釋せられて居る。問題は「群疑論」に除き「要集」にも省かれた諸師釋の第十四問たる

十四觀經取者是第二階人。壽經除者是第三階人(大正四七<sup>p.44</sup>A)

である。これこそ三階教に於ける大觀兩經の會通であり、時に此れは餘師の調和論に對して、彌陀淨土教への破壊論である。従つて「群疑論」逆誹除取章の殆ど全部は此の第十四の信行の説に對して太過失大滅失の語に始まる一大理論闘争に終始して居るのである。集主の炯眼、當然這般の消息を看破して「要集」の理論構成の一因子とされた事を思はしめられ

る。かくて、「群疑論」に於ては同一卷中にあつても距離を保つこの二問答が、「要集」の上では連結されて義意を有儀的にせられて居るのであり、「佛藏經」と「觀經」、更に「觀經」と「大經」と淨土門内への誘導は、そこに三階教所立の義趣に對する集主の一つの心構へとして感受されるものを持つのである。

『要集』問答料簡門の第七諸行勝劣は、往生業中、念佛三昧の爲勝を問答決擇するもので、先づ「觀佛經」の六噉、次に「般舟經」の念佛三昧は諸功德中最尊第一なりとする文を引證して行體に就いて決判する。次に行相に就いて判ずるには「易行品」の難易二道判を採つて、これに加釋せらる。かくて、校量に就いては「寶積經」・「大集月藏分」を引いて判じ、最後に「法華經」分別功德品の「一念信解」の文を引いて妨難を通釋して一章を完了せられる。一讀して明瞭なる如く、次から次に經證を列擧して、「要集」序文以來一貫せる末代濁世の教行としての往生業に於ける念佛三昧の地位を更に確認せられたあたり、目覚ましい論述の展開である。所で、かゝる論旨は「群疑論」卷三の像末念佛章(大正四七<sup>p.46</sup>—<sup>p.47</sup>B)の趣旨の展開と考へられ、そこに出づる三階師の念佛三昧觀への鋭い批判への凝視が存する事を思はせられる。姑く其の由を觀察しよう。

る事、暗禪の定に非ざる事、今の所立は圓人の念佛三昧にして諸行に超過するものなる事を縷々説示せらる。而も其の行相を明す下は「易行品」を引いて「信方便易行」(p.86B)の語を掲げられてある事に依つて、集主が、三階教の念佛三昧觀や「群疑論」に於ける通相の會釋の程度を克服して行かれた事を知るであらう。三階師が彌陀一佛への別歸を不當とする事は其の教理のもつ特殊性であるが、今「要集」に於ては「易行品」を引き畢つて

文中學過去現在一百餘佛、彌勒・金剛藏・淨名・無盡意・跋陀婆羅・文殊・妙音・師子吼・香象・常精進・觀音・勢至等一百餘大菩薩、其中廣讚彌陀佛也。於諸行中唯念佛行易修證上位。知是最勝行(p.86B)

として結成せられて居る。「易行品」所見の佛菩薩群像が及ぼせる「要集」への感化に就いては更に別論を俟つべきであるが、「七階佛名」に於ける普光佛等の五十三佛と「易行品」との関係が推測せられて居る事は、立場を異にしたながらも一種の普佛思想の存する事を物語るものである。而して、今「要集」が前引の自釋を以て「易行品」を助顯せられて居るのは、見地を變へると、三階教に於ける普佛禮懺が結局事實に於ては空漠に歸する事と反對に、彌陀一佛を中心として諸佛菩薩を力

『群疑論』像末念佛章には先づ「大集月藏分」に據る佛滅後五百歳の五堅固説を掲げ、三階師が十六觀及び念佛三昧は並びに定慧の法であるから學慧堅固の第一五百年と學定堅固の第二五百年に於てはさもあれ、第三の五百年以後に於ては當根佛法では無いとして當時の佛教界に對する重大な反省を促せる事を示してある。「群疑論」の此れに對する會釋は、十六觀及び念佛三昧には淺深があつて、深は色界修慧定心により、淺は欲家聞思慧心によるものであるから、後者は第二第三等の五百年に通ずるとして「賢護經」を引いて末世五百年の三昧流布を示してある。かくて最後に

信行禪師乃於三階集錄之中浪陳興廢、言千年已後唯合行、普不合行別、遂將念佛三昧等爲不當根佛法義當廢教、非是學時。何其謬矣。(大正四七<sup>p.47</sup>B)

と結んで、念佛三昧こそ末世相應の行で、反つて三階師のいふ「當根佛法」に當るとするのである。所で問題は「要集」に存する。「要集」に於ける念佛三昧の高調は「群疑論」と同様であるけれども、その過程に於て非常な相違があり、結局、兩者の内容に著しい逕庭を生じたのである。即ち、「群疑論」に於ては念佛三昧を淺深に分つて現在修すべきは淺の念佛三昧なりとする。而るに「要集」は校量の下で念佛三昧の王三昧な

強く統攝せしめんとする所に深い義趣を覺えしめる事となるのである。これを喩へて見ると、三階教に於ける佛菩薩の群像は單に圓周上の各點としてのみ認識せられて居るけれども、「要集」に於てはそれが絶えず中心との輻射的結合に於て反省されて居ると云へるであらう。こゝに現實的な「當根佛法」が成立するのである。かくて曩に言及した大文第六別時念佛門の臨終行儀に於ける三十十方一切三寶を禮念せしめられる意味を非三階教的な立場に於て理解し得るものがあらう。

『要集』問答料簡門の第九助道資緣に於て、集主は「大集月藏分」・「梵網經」・「涅槃經」・「十輪經」等を引いて懇切に今時破戒者に對する資緣の有無を論じて諸經の異説を會通されて居る。所で、そこに見える經文は、奇しくも三階教に於て第三階時の時濁とし末法時に於ける別法無得道の文證たるものであり、集主が末世破戒者を溫和に包容せられて居る態度とは永く袂を別つものである。

① 『三階教之研究』九五頁によると「三階佛法」に五十七回、「對根起行法」に八回で計六十五回の引用となる。

② 『觀樂王乘上菩薩經』に見える過去五十三佛は三階教に於て「七階佛名」に用ひられ、矢吹博士は、「略、龍樹の「十住毘婆娑論」易行品」に於ける五十三佛と同じ(『三階教之研究』五二六頁)

とせらる。

五

「二乗要決」に於ける一乘三乘兩思想への批判は、先づ幾多の聖教量に據り、大陸・本朝に互る數多の大師を拉し來つて、それ／＼の立場に於て討論せしめて徐ろに理論體系を整備せられ、最後に集主は「今謂」等として決判せられて居る。「要集」の如く本書も「文類」的な所に特色を持つのであり、その諸師の引文に於て、それ／＼の批判が閃いて居るのである。

今、卷中大文第四引一切衆生有性成佛文を見ると注目すべき引文と問答とを見出すのである。凡そ此の大文第四の一章は、これを寶師所引六經二論(大經釋、理學釋、法華經、密學及法鼓)と私引十二文(涅槃經、八文、新華嚴經、大智度論、經初加應、法華經、寶性論、佛性論)と最後たる「佛性論」の引用には更に三分される。即ち先づ正しく論を引いて闡提成佛を示し、次に寶公所説の佛性眞了義の語を引いて世親菩薩の決判を出し、後に問答料簡四番となるのであるが、この内第一・第二の兩問答に於て集主は鋭く「神昉師」なる一人師の所説を批判し破斥せられて居る事に注目したい。此の四番問答の第一は、闡提成佛を説く「佛性論」の文に對する神昉の會釋を擧げて問文とし、これに對して理行

の二性を分つことなく皆成佛と決して一乘の大施を掲げられるのである。即ち、

問。神昉師通佛性論文曰、若眞如理性一切皆有。是名了說。非謂行性。又解、斷善闡提決定無有般涅槃性。是不了說、非說畢竟。上此義云何。答。今不要分理性行性唯皆成佛。是正所立。若許理性遍一切者、即是當許一切成佛。不應分別斷善畢竟。…(大正七四・P.345B)

とせられるので、集主が總じて神昉の義を拒否せられる事を知る。更に第二問答に於て、神昉が尙も自義を執して、不定性を誘引せんが爲に衆生には自性清淨あつて解脱を得ると説かれたものと會釋するに對して、鋭く追窮し、「此釋甚非」として、詳審に文の起盡を示して破斥されて居る。即ち

問。昉師亦通曰、一切皆有清淨佛性者約理佛性。如前已說。然離遍計定實有無故說本有無而離有無。而言若有衆生有自性清淨永不得解脫者無有是處者、此就有彼如來種分少分有情、爲引不定速起大乘故作是說。是以無過。順經作論有此例故。上此義云何。答。此釋甚非。何者、若有衆生有自性等是第二卷文。若依不言一切衆生故證少分有性人者、如何可會彼第一卷一切衆生皆悉本有清淨佛性若永不得般涅槃者無有是處耶。此文既遮少分。云

何強作是釋。即座之間暫用會釋、論其實理終無所獲。

又論既言佛性即是二空眞如等云云二空眞如豈是少分有情所具。若許遍者、由此所得菩提心等亦應遍有。若猶不信、

更加何言令生信解。賢哲何似失本心耶(大正七四・P.345B)

とあるものこれである。こゝで、かくも集主が力を盡して破斥せられる「神昉」なる大師は如何なる教學的立場にあるのであらうか。唐宋の兩高僧傳に其の名を見ざる此の大師は、矢吹博士に由つて三階師の一人なる事が指摘せられて居る(三階教之研究、P.102頁)。即ち、唐の玄奘三藏が永徽二年十二月に「大乘大集地藏十輪經」を譯した時、其の經序を製して尊信の情を示した昉法師は、その所説が三階師の口吻に類する事よりして、かの「釋門自鏡錄」に見える慈悲寺の僧神昉が「十輪經」を修學して最後に惡報を獲たる記事と合して、こゝに玄奘門下の神昉は三階師の一人と見るべき事となるのである。且、神昉が「十輪經鈔」を撰して「有大善知識信行禪師」と云ひ、本朝に於ても道忠が「群疑論探要記」に「十輪經鈔」を引いて三階教を論じてある事は、三階教典籍中の「十輪經」の引用が量的多敷を占めて居る事と共に注目されてよい。今、集主は、この神昉に對して玄奘門下に於ける法相學徒の一人としての認識が存すると共に、三階師の一人としての彼の立場をも窺推

されて居たのではあるまいか。

更に「二乗要決」大文第六遮無性有情執を見ると五節に分れ、其の第三明一師慧日初足の下に、其の所引の「無上依經」を通過して、

此外亦有信行佛教、人天乘性、及以二乘種性異生。此亦不能證得佛身(大正七四・P.357C)

と述べ、「信行佛教」の語は三階教を所破の對象とせられてある如くである。その所由に就いては詳論を見ないが、「要集」所引の「群疑論」等の所説を參酌すれば、三一を分たざる普法の三階教、而して末法の對根起行は三乘行を「福德爲大」と云ふ神昉の「十輪經鈔」の趣旨(原註記、卷下、P.399頁)は、「往生要集」「二乗要決」の著者に取つては、確かに往生思想並びに權實教判の立場よりして鋭く拒否すべきものが存した事を知るのである。

むすび

以上、先づ「往生要集」を通過して、單なる偶合や宗教思想上の平行的類似性を持つに留まるものをも瞥見し、其の相反撥し拒否しあふ教學思想を「群疑論」「西方要決」等の媒體を介して摘出し、集主がこれらを通じて感得せられた隋唐佛

教の氛圍氣の分子にほのかなる三階教の感觸が存したのであらう事を考へたのである。但し三階教に就いての直接の言及はないが、「群疑論」よりの引用が三階教關係の文章に於て屢々これを見受ける事や、南都教學に深き造詣を有せられた博覽の集主の搜索が、何等かの暗流として集主の心裡に描曳したものを齎さなかつたとは言へないであらう。而して集主の立場が冷靜そのもので懐感の熱烈なる對比されうる事は、一には時代の運庭よりして考へられる。即ち三階教は隋唐の間に崛起したが、其の未完成の體系を既に唐代に於て完成せる淨土教學の諸家に依つて排撃され了つたものであり、集主の時代は大陸にあつては宋朝に降るもので現實の教學界に於ては切實な存在では無い事である。かくして批判的な「一乘要決」に於て教學理論としての討究を客觀的に果遂し得る心理的餘裕餘裕を見出し得るのである。淨土教學に關しても、集主の時代は近く台嶺の内に隠然たる淨土教思想が天台教學の支持の元に社會へ其の觸手を伸ばして居る際で、往生思想排斥の聲は聞ゆべくも無かつた時代なのである。従つて「往生要集」にあつても「群疑論」・「西方要決」の如き表面化を避け、極めて冷靜にその理論體系の内部に潜在せしめ、巧みに教學史的問題として捌かれた事を推察し得ると思ふ。尙、「三

階教の研究」に示されたる三階教籍に於ける引用經典の約半數が「往生要集」にも其の名を表して居る事は、固より有機的關聯を持つものではないが、人語を避けて佛語に従はんとす「集」録形態をもつ三階教籍の特長が淨土教籍との類似を持つ點に於て、一の比較思想的な意味を見出すのである。かくして共に末法佛敎たるの自覺に於て考へられる三階教・淨土教の幾多の同異が論ぜられて居るが、其の際、惠心教學の内にもその資料的な存在がある事を考へられるのであり、「往生要集」・「一乘要決」のもつ幾多の問題は實に其の指標として理解すべきであらう。

- ① 奈良朝に於ける三階教籍の傳來は「正倉院文書」中に「明三階佛法」・「略明法界衆生根機淺深法」の二部として確證せられ、鎌倉時代にあつても明惠の十三忌辰たる寛元二年に於ける「三階佛法」等の出名、凝然の「五教章通略記」に見える「三階集録」・道忠の「群疑論探要記」に現れる「三階集録」・「法界衆生根機淺深法」・「十輪經鈔」の書目の存在等、「三階教の研究」百五十一頁以下参照)は、南都教學に於ける三階教籍の存在を示すのである。

- ② 三階教の所依經典として、矢吹博士は三階教の根本教籍たりし本邦所傳「三階佛法」並びに熾焯出土「對根起行法」中に經名を列舉引用せるものを抽出して三十九部を計出せられた。「三階教の研究」五九五頁より五九七頁までの表示を参照)今、この三十

九部の經典中、「要集」所引の經典は、「十輪經」・「涅槃經」・「大集月藏分」・「佛藏經」・「雜阿含經」・「迦葉經」(佛遺日摩尼寶經)として、「妙法蓮華經」・「摩訶摩耶經」・「華嚴經」・「灌頂經」・「大集經」・「觀佛三昧經」・「優婆塞戒經」・「思益經」・「維

趙城廣勝寺行(九頁より續)  
あらたかなわけである。上寺に到ると眺望極めて良く、四方幾十里とひらけた南山西平原が一目に集つて来る。十三重の大塔は琉璃色をなして高く聳え、堂殿も大きく且敷が多い。「有」と答へる。その有る所へ連れて行くと住持の私室の如きと答へる。その有る所へ連れて行くとガラス戸欄に上海で影印したものを蔵してあるである。「本物の卷子本の金剛藏經は」と問ふと「没」と答へる。通譯を以つての問答だから要領を得なかつたが、結局住持の言ふのは、本年三月十五日早晩に八路軍が大舉して來り藏經を全部掠つて逃げたといふので、大いに奇怪であるが、それ以上どうにもならぬ。きけば住持妙勸は本年一月死去して新任本一となつたので、我々に對してどの程度の理解があるのか解らぬ。寺僧全體で二十人居るといふ。大きな飼犬が我々の姿をみてワンワン吠え立てる。道端君は金剛藏經の見られぬのに氣を悪くして、「藏經を藏してゐた場所は何處だ、そこへ案内せよ」と言ひ出し、寺僧は塔の上だとして、塔の第二層あたりの室へ連れて行つた。塔内部は暗くてこんな所に置きやうもないのだが、そうなるを全くわけのわからぬこととなり、我々の目的は完全に満たされないものだ。一行中の縣の役人も「どこかに隠してあるのではないでせうか」と言ふのであるが、我々は佛教徒であり、それ以上探索すること等は夢にも考へてゐない。

察するに、事變以來散佚したことは確實であるが、だからと言つて全部無くなつたとは思へない。とにかく此日の報告としては「金剛藏經は廣勝寺に存在せざるもの如し」とする外は致し方がない。それと共に、當分は廣勝寺に金剛藏經を見得る人はあるまい。事變がおさまると、治安が恢復すれば或は再び日の光りを浴びるかも知れぬと思ふ。  
寺僧のもてなす、手製のうどんや、つめの賣、くるみ等をよばれて、空腹は露され、庭内を散策し、記念撮影をなして下山することとした。  
振返れば、明代、僧達連が重修したといふ三十六丈、十三層八角の大碑塔は、琉璃色に陽光に照返へして美しい。その塔の美觀に一時足を止める。聞けば南同蒲線の汽車の窓よりも遙かに望見せられるといふから、いづれ山西の旅行が済んで歸る折に驗してみたいものであるが、それにしても再び傍で見上げることは出来ないのだ。昔は阿育王塔と傳説されたといふ由緒の塔である。  
道覺村で再びトラックに身を托すると、行路の緊張に比較して、ほつとした氣分になり、急に疲れが出て來たやうだ。金剛藏經を見るをえなかつたせつなさに首うなだれてしまつた。夕方漸く臨汾に歸り、諸方面へ挨拶して宿舎東本願寺へ歸る。トラックで打つた腰骨が痛い。しかし之で草履れてなるものか。明日は運城へ向つて出發することとする。(小笠原)